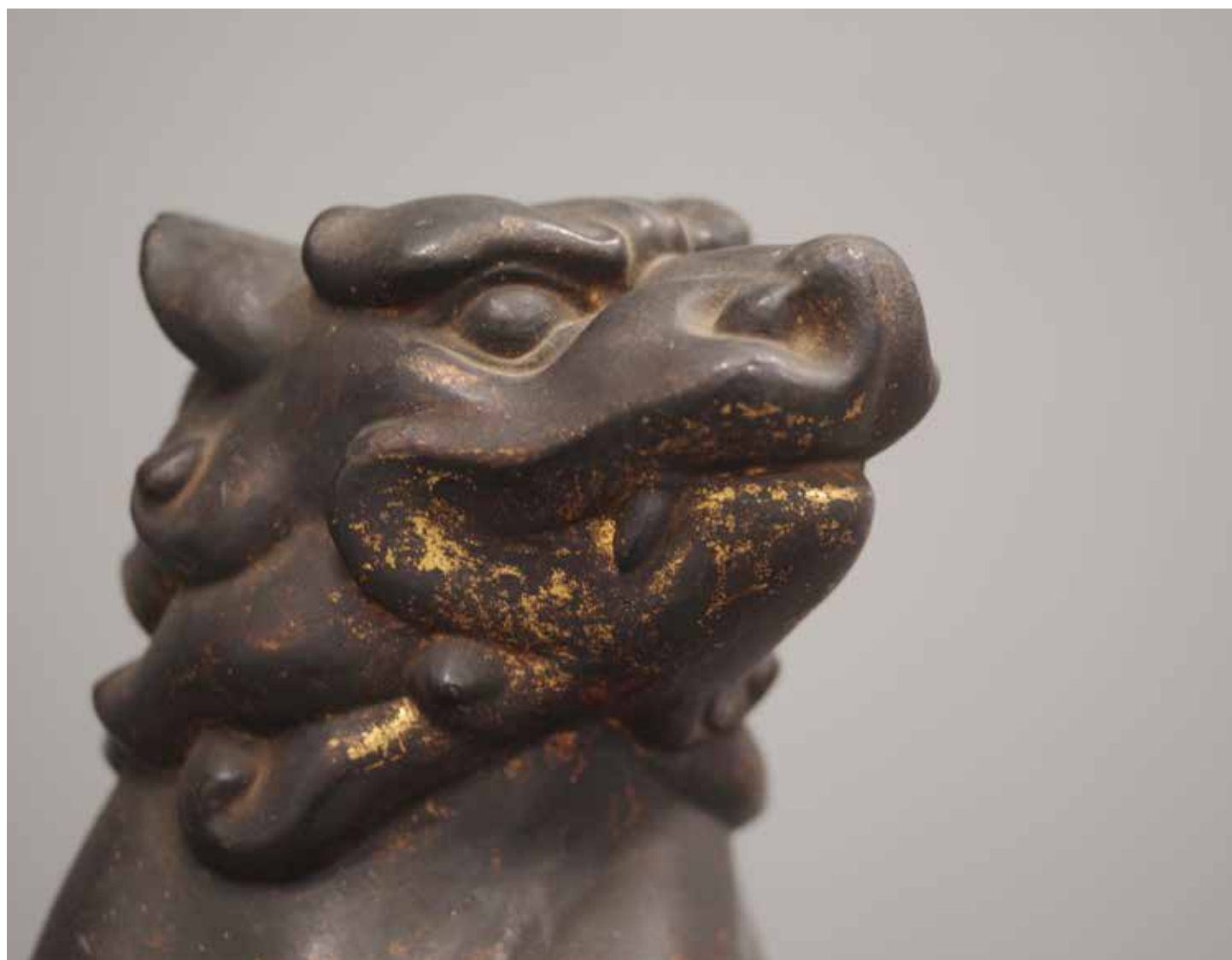


上原 美術館 通信



編集・発行 公益財団法人上原美術館
2022年1月14日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



人は神や仏に様々な祈りを捧げてきました。祈りに応えて神仏が示したとされる聖なるメッセージは最大限の敬意をもって文字に写され、聖典となりますが、神聖な聖典は時に神仏への尊崇を込めて華麗に装飾されました。一方で人間は神や聖なる存在を目に見えるかたちとして表現しようと試み、仏像や神像が生まれました。本展はこのような神聖な文字、聖なるかたちをとりあげ、祈りの中で生まれた美を紹介しします。

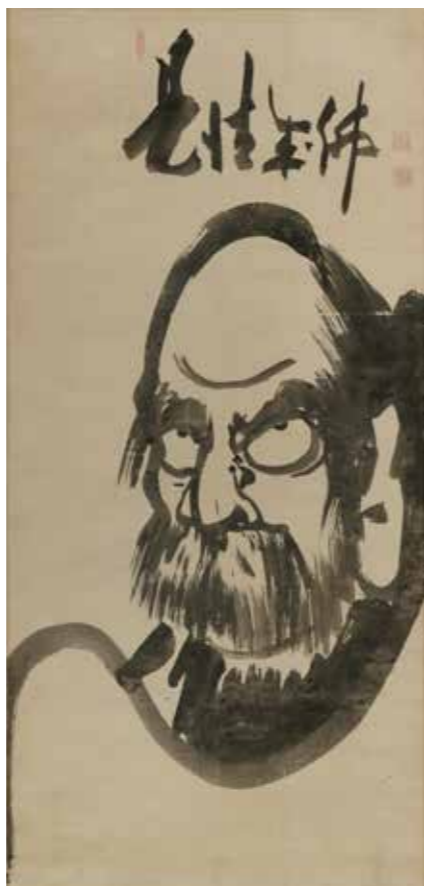
展示室に向かう回廊の突き当りで出迎えるのは、平安時代の狛犬です。狛犬は神社の入口の左右に控え、聖域を護る神使として有名ですが、実は仏教とともに日本に伝来したもので、寺や貴人を護る守護獣でもあります。

聖域の番人である狛犬の次に控えるのはイコンです。イコンとはキリスト教の一派である正教会(ギリシア正教、東方正教会)の聖像で、本作は東ヨーロッパで17世紀に描かれた聖母子の板絵です。人間的なカトリックの聖母子像と異なり、本図は暗く重厚な背景に謹厳な姿で描かれ、神の威光を表現します。本展ではこのイコンに、フランスの画家ジョルジュ・ルオー(1871-1958年)が描くキリストを添えて展示します。ルオーは太く強い輪郭線と個性的な色彩感覚が魅力的な画家ですが、敬虔なクリスチャンとしてキリストとその生涯を題材とする作品も多数描いています。正教会のイコンと、カトリックを信じたルオー。同じキリスト教に基づきながら異なる祈りの画面を開花させた作品をご覧ください。

仏教館奥の展示室では仏教が生み出した祈りの美を展示します。仏教のお経(経典)は、釈尊が説いた教え、仏陀の言葉を記録したものとされ、仏教徒にとってこの上なく尊いものです。奈良時代は仏教の力で国を護ろうとする鎮護国家思想に基づき、特別に選ばれた写経生によって国家事業として写経が行われました。この時代の古写経は当時を代表する年号から天平写経と呼ばれています。本展で展示の『中阿含経』はそのうちのひとつで、今からおよそ千二百数十年前に制作された古写経です。一点一画をも疎かにしない謹厳な文字が9mにもわたって書き連ねられるさまは、古写経の雄と賞される天平写経の魅力を存分に堪能できます。『紫紙金字華嚴経断簡』も天平写経を代表する作例です。希少なムラサキ(紫草)の汁で濃紫色に染めた料紙に金泥で書写した美しい古写経で、文中に「善財童子」が登場することから『華嚴経』の断簡であることがわかります。本経は仏教を深く信仰、諸国に国分寺を建立し、東大寺に大仏を建立

した聖武天皇が、大仏に奉納したお経だと考えられています。深い紫色を背景に輝く金色の文字は、太陽が没した夕刻の空に輝く星々を思わせ、正確につづられた一文字一文字からは謹厳で張り詰めた緊張感と強い筆勢を感じることができます。美しさや迫力を兼ね備えた天平写経の傑作です。

展示室の一番奥からこちらを睨み据えるのが、白隠慧鶴筆《達磨図》です。白隠(1686-1769年)は駿河国原宿(現・静岡県沼津市原)に生まれ、臨済禅中興の祖として尊崇される禅僧で、生涯におびただしい数の禅画を描きました。白隠の禅画は難解な仏典を読み解くことが難しい民衆教化のため、さらには言語では伝えることができないとされる禅の悟りの境地を弟子たちに視覚的に伝えるものでした。本図は禅の開祖、達磨の上半身を大きく、大胆豪放な筆致で描くもので、当時70代半ばを超えていたと思われる白隠の衰えぬ気迫を感じさせる大作です。本展ではその他、平安時代の十一面観音像、二天像、鎌倉時代の阿弥陀如来像など当館が所蔵する仏教美術を厳選して展示いたします。多様で豊かな宗教美術の世界をお楽しみください。(田島)



白隠慧鶴《達磨図》
(江戸時代/紙本墨画/当館蔵)

新年を迎え、少しずつ春の香りを感じる季節となりました。伊豆・下田の爪木崎の海岸では年末から年始にかけて300万本の水仙の花が咲き誇り、一面に潮風と花の香りが広がります。2月は河津桜の季節です。明るい日差しと河津桜の薄紅色の色彩とともに、川辺から漂う菜の花の香りは、春の訪れを感じさせます。

「梅の花 香をかぐはしみ 遠けども 心もしのに 君をしぞ思ふ」(市川王、天平宝字2[758]年、万葉集)。これは今から1200年以上前の宴で、梅の香りに託して敬愛の心を詠んだ歌です。日本の芸術では古来より花の香りにさまざまな思いが重ねられてきました。その香りを想像すると、それまでには感じられなかった世界が目の前にあらわれます。絵画もまた、描かれた花の香りをイメージしてみると、そこには豊かな空間が広がっています。

ルドンが描き出す《花瓶の花》にはアネモネをはじめ、色とりどりの花が咲き乱れています。ルドンは自らが描く花を「再現と想起という二つの岸の合流点にやってきた花ばな」と述べました。現実の花が夢幻の世界と合流するように混じり合うその香りは、パステルの不思議な色彩と相まって見るものを幻想的な世界へと導きます。当時の批評家はルドンの花の絵画について次のように述べています。「花がパステルになったのか、パステルが花に容れられたのかだれもしらない。(中略)それは控え目だが変わることはない匂いがする。それは妖精だろうか。女神だろうか。いや、それ自身である」。

ピサロ《エラニーの牧場》では、牛が草をはむ田園風景の中に林檎の花が咲き誇っています。明るい色彩であらわされた花々は甘い香りを漂わせて、北フランスの湿潤な大気を吹き抜ける爽やかな新緑の風を感じさせます。安井曾太郎《桜と鉢形城址》は終戦間近の1945年春に描かれた作品です。疎開先である埼玉県寄居町に桜が咲き誇る田園風景には、穏やかな春の香りが広がります。

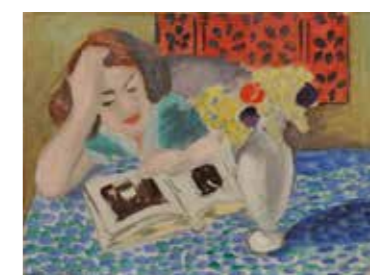
本展ではモネ、ルノワール、マティス、梅原龍三郎など上原コレクションから花の香り漂う絵画をご紹介します。美しい花々に包まれてゆったりとしたひとときをお過ごしいただけましたら幸いです。(土森)



オディロン・ルドン《花瓶の花》1910年頃



カミーユ・ピサロ《エラニーの牧場》1885年



アンリ・マティス《読書する女性》1922年



梅原龍三郎《薔薇図》
1940(昭和15)年



松本雲松《虎図》(江戸時代後期/個人蔵)は
仏教館にて1/22~4/17まで公開予定です。

2022年は寅年。今回は寅にちなんで
虎の襖絵と描いた絵師をご紹介します。

1頭の虎が画面中央に座り込み、大
きな片手をべろりと舐めながら、こち
らを見据えています。小さく描かれた
耳や、猫のように見える姿は可愛らし
く、そのユーモラスな表情に見ている
方も心が和むようです。こうした猫の
ような虎は、江戸時代に描かれた絵に
よくみられる表現です。当時、日本の
人々が生きた虎を見る機会があまりな
かったことがこの可愛らしい虎を生み
出すことになったのかもしれません。

本図はもともと襖絵で、4面に渡って
竹林で戯れる2頭の虎が描かれていま
した。残念ながら1頭の虎の上半身部分
が描かれた1面が失われ、現在は3面伝
わっているのみです。この襖絵は、安政
の大津波(1854)で被害を受けた下田市
の宝福寺に伝わったといい、半分ほど
が津波で水没してしまったそうです。現
状の保存状態はあまりよくありません

が、水が滲んだ跡など、当時の津波の記
憶を今に伝えるものといえるでしょう。

さて、本図を描いたのは、江戸の終
り頃に下田に住み、書画や仏像を作っ
ていた松本雲松と伝えられます。当館
では幕末に生きた雲松の造像活動をご
紹介しようと2006年、2014年の2回、
展覧会を開催しました。この展覧会
では、今も下田市内にいらっしゃる雲松
のご子孫から、貴重なお話をうかがう
ことができました。

もと江戸生まれの雲松は19歳頃に知
人を頼り、はるばる伊豆へとやってき
ました。当時、永井太犬丸と称してい
ましたが、すでに不動明王図などの絵を
描き、また仏像を彫る技術も得てい
たようで、20代で数点の仏像を造って
います。その後、下田の町中で寺子屋を
開き、読み書きを教えていました。30
代には下田の仏具商へ婿養子に入り、
名前を松本源兵衛と名乗ります。60代
頃に法眼位を授けられ、松本雲松法眼

と名乗るようになりました。この頃の
作品には、雲松法眼と誇らしげに書し
たものが残されています。晩年も多く
の書画を残しましたが、78歳の時、東
京根岸にある遠縁の家で没しました。

その生涯で書画、仏像あわせて約
120点の作品を遺した雲松ですが、実
は一人の絵師、仏師の変遷をこれだけ
詳細にたどれることは稀で、雲松の場
合は作品が多く伊豆南部地域に残って
いたこと、ほとんどの作品に年齢や制
作年が墨書されていたことからわかっ
たことなのです。これは江戸時代末頃
の絵師、仏師がどのような活動を行
っていたかを知る一例として貴重な
手がかりになります。

今回ご紹介した襖絵や調査を行った
作品以外にも、雲松は多くの書画、仏
像を残しました。未見のもの、未知の
ものなど様々な作品があります。今後
も、調査からさらなる作品との出あい
を期待したいと思います。

新春を迎え、花々の香り漂う季節と
なりました。当館ではこの度、美しい桜
が咲き誇る安井曾太郎《桜と鉢形城址》
を新たに収蔵しました。

桜並木が見えるのは埼玉県寄居町を
流れる荒川の土手、玉淀河原と呼ばれ
る桜の名所です。満開の花の向こうに
は荒川を挟んで鉢形城址が見え、そこ
には鮮やかな黄色が広がります。中世
に築城された鉢形城は長瀬溪谷の下流
にあたる河岸段丘にあり、豊臣秀吉の
大軍に包囲され1ヶ月にわたって抵抗
したという難攻不落の城塞でした。秩
父山地に近いこの川辺には岩が露出
する独特の眺めを見ることができます。
本作でも画面中央辺りに岩盤が明るい
灰色で描かれています。この灰色は桜
の明るいピンクがかった白と、鉢形城
址の黄色を緩やかに繋いでいます。丘
の所々には鮮やかな紫が塗られ、画面
に強いアクセントをもたらしています。
画面全体を見るとそれらの色彩と黄色、
前景の緑が強いコントラストを保ちな
がら調和し、桜の明るい色彩を一層引
き立てています。この作品は選暦を前
にした安井が終戦の年に描いたもの。



安井曾太郎《桜と鉢形城址》1945(昭和20)年 油彩・カンヴァス 60.2×72.7cm
新収蔵・初公開

この時期に安井が描いた風景画は本作
以外ほとんど知られておらず、貴重な
作例です。

安井曾太郎は明治21(1888)年、京都
の木綿問屋に生まれました。20歳のと
きにフランスへ留学、帰国後は思うよ
うに描けない時期が続きますが、40代
になる1929(昭和4)年頃から「安井様
式」と呼ばれるスタイルを確立してい
きます。安井の風景画の代表作の一つ
である焼岳シリーズは1940年代初頭の
作品です。戦争の影が色濃くなってゆ
く1944(昭和19)年8月、安井は美術展
審査のため満州へ渡り、北京にも立ち
寄って制作を行いました。旅と制作の
日々で疲れたのか、年末に北京で病に
侵されて、翌1945(昭和20)年3月に帰
国しました。

帰国するとすぐに安井は寄居町茅町
に疎開します。東京・下落合の自宅は5
月の空襲で焼けてしまいました。安井が
寄居町で借りた住まいは農家の蚕室を
改造した家で、絵画の制作には苦勞し
たようです。そのため寄居町で制作さ
れた油彩画は多くありません。代表的
な作品としては、《藤山愛一郎の肖像》

(1945~46年)や《桜》
(1946年、アーティゾン美
術館)などがありますが、油彩の風景画は
今のところ《桜と鉢形城址》しか知られ
ていません。本作は
個人コレクターが大切
に愛蔵してきたため、
近年では公開され
る機会がありません
でした。1946(昭
和21)年7月の清風
会展以降は出品歴

がなく、図版掲載も1点が知られるの
みなので(『近代の美術42 安井曾太郎』至
文社、1977年)、「再発見された幻の安井
作品」ということができるかもしれま
せん。

安井は疎開した翌年の1946(昭和
21)年秋頃からヘルペスによる眼病で
一時、絵が描けなくなります。1947(昭
和22)年11月には寄居町から下落合に
戻り、しばらくして病が回復します。
1949(昭和24)年には制作の拠点を湯
河原に移し、最晩年の画境に到達しま
す。《桜と鉢形城址》は、焼岳や北京の
風景画と湯河原の風景画を繋ぐ重要な
作品といえます。

寄居町での生活は僅か2年半でした
が、安井と地元とは深い繋がりが生ま
れました。1946(昭和21)年、安井の長男・
慶一郎氏が寄居町武町の鮮魚店の長
女・良子さんと結婚したのです(『広報よ
りい』2017年12月号)。良子さんは湯河原
時代の安井とともに生活し、様々な制作
の場面を目にしています。

2010年に当館で安井曾太郎展を開
催した際、良子さんから湯河原での安
井画伯の思い出をお伺いしました。中
でも印象的だったのが、油彩画《銀化
せる鯛》(1955年、当館蔵)のエピソード
です。お正月に貰った鯛を5月まで描き
腐ってしまったこと、その匂いの中
でも安井は平気で描いていたこと、描き
終わった後、手で持つことができずお
皿ごと山に埋葬したこと。楽しそうな
声からは、湯河原での安井との生活が
とても幸せだったことが伝わってき
ました。いまそのお話を振り返ると、良子
さんの故郷・寄居町で描かれた《桜と
鉢形城址》と《銀化せる鯛》がともに上
原コレクションにあることに、何か不
思議な縁を感じます。

ギャラリートーク

特別展「静岡の仏像+伊豆の仏像」および企画展「鍋木清方《築地川》の世界」開催期間中、担当学芸員によるギャラリートーク(作品解説)を開催しました。各回とも、密にならないように気をつけながら、展覧会のみどころをご紹介します。

授業入館

下田市立稲生沢中学校 11月2日、下田市立下田小学校 11月5日、下田市立下田中学校 11月9日、11日、南伊豆町立南伊豆中学校 11月18日、下田市立稲穂中学校 12月2日
奈良・京都方面の修学旅行の事前学習や、地域学習、美術鑑賞等で多くの学校にご来館いただきました。特に修学旅行の事前学習は仏像の見分け方や、奈良や京都の寺院で出あえる仏像についてお話をしました。

出張授業

河津町立小学校3校合同授業 11月15日

6年生を対象に、当館の所蔵品をカードにしたアートカードによる美術鑑賞体験を行いました。いくつかのグループに分かれて、アートカードを用いた3種類のゲームを楽しみました。参加した児童は緊張がとけるにつれ、お互いに意見や声をかけあい、盛り上がる様子が見られました。

研修受け入れ

賀茂地区図工美術部研修部 11月8日

賀茂地区の図工美術教員を対象に美術教育についての研修を行いました。はじめに当館の作品から印象派の作品数点を学芸員が解説し、当館のアートカードを用いてアートゲーム体験を行いました。またピカソの《ゲルニカ》をテーマに、中学校の授業で美術鑑賞を行う際の一例を紹介し、最後にワークショップ体験として、透明水彩絵具を用いた色あそびを行いました。

調査

熱海市伊豆山・逢初地蔵堂 10月18日

熱海市教育委員会からの依頼で、土石流被害に遭った熱海市伊豆山の逢初地蔵堂の仏像の実見を行いました。当日は立ち合いをいただいた地区の方に今後の保存管理、修理の際の方針などの助言を行いました。

対外活動

伊豆半島ジオパーク・伊豆半島子ども絵画コンクール審査員 10月13日

かなみ仏の里美術館ボランティアガイド養成講座 11月2日、16日

河津バガテル公園での講演「はじめての印象派」11月3日

下田市史講座「念仏行者・徳本の伊豆来訪」12月12日

シンポジウム「日本の美術館とナビ派—地方美術館から考える研究の可能性」12月13日
博物館資料論の講座 静岡文化芸術大学 12月16日

土屋学芸員が、伊豆半島ジオパーク推進協議会主催の子ども絵画コンクールで審査員をつとめました。伊豆半島内の小中学生が描いた伊豆ジオスポットの力作が集まっていました。

かなみ仏の里美術館(函南町)からの依頼で、田島主任学芸員が、ボランティアガイド養成の講座講師を務めました。また下田市教育委員会主催の下田市史講座では、江戸時代後期に伊豆へ来た徳本上人と市内に残る徳本念仏塔についてお話をしました。土森主任学芸員は、河津町バガテル公園の講演で印象派についてお話をしました。また一橋大学大学院言語社会研究科主催のオンラインシンポジウムにおいて、「ポナールの絵画における造形的特質—上原コレクションを中心に」と題して発表を行いました。



令和4(2022)年度
教室受講生募集

上原美術館では令和4年4月からの教室受講生を募集しています。

日本画教室

講師 牧野伸英先生(日本画家、日本美術院特待)

日時 毎月第2、4火曜日 13:00~16:00

デッサン・水彩画教室

講師 小野憲一先生(現代美術作家)

日時 毎月第2、4水曜日 13:00~16:00

仏像彫刻教室

講師 岩松拾文先生・大谷文進先生(仏像彫刻家)

日時 毎月第3日曜日 9:30~12:00

写経教室

講師 山田修也先生(書家)

日時 毎月第2日曜日 13:00~15:30

会場 上原美術館アトリエ
受講料 無料(用材、写生会の施設入場料等は実費負担)
募集人数 各教室とも若干名(応募者多数の場合は抽選)
受講条件 全日程参加できる方、ご自分で通える方(お1人1教室のみ応募可)※初心者迎
応募方法 Eメールもしくは郵便はがきに氏名、年齢、住所、電話番号、ご希望の教室名、経験の有無を明記の上、2022年3月10日(必着)までにご応募ください。美術館受付でもお受けいたします。なお応募結果は3月15日頃、応募者全員に郵送で通知いたします。
お申し込み先 〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
上原美術館「教室募集」係
Eメール info@uehara-museum.or.jp



特別展カタログ発行のお知らせ

特別展「静岡の仏像+伊豆の仏像」のカタログを発行いたしました。展示したすべての仏像の写真と解説、および論考が掲載されています。1冊1000円で美術館受付にて販売しております。詳細はお電話(0558-28-1228)またはEメール(info@uehara-museum.or.jp)にてお問合せください。



昨年の10月1日に、静岡県は新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う緊急事態宣言が解除されました。それに伴い、美術館にご来館くださるお客様が少しずつではありますが、増えているようです。美術館では感染症予防対策を引き続き行っておりますので、ご来館の際はご協力のほど、どうぞよろしくお願いたします。

美術館の庭はまだ冬枯れの様相を呈していますが、下田の海沿い須崎地区の水仙、アロエの赤い花、そして2月には河津町の河津桜と、伊豆半島には少しずつ春の香りが漂い始めました。当館は1月下旬から上原コレクション名品選を開催。花の香りを感じるような展示とともに、伊豆の春をお楽しみください。
(櫻井)



没後50年 かひら きよかた 鑑木清方展

東京会場 2022年3月18日(金)～5月8日(日) 東京国立近代美術館
京都会場 2022年5月27日(金)～7月10日(日) 京都国立近代美術館

日本画家・鑑木清方(1878-1972年)の没後50年にあたる2022年、東京国立近代美術館と京都国立近代美術館で、久しぶりに鑑木清方の大回顧展が開催されます。とくに京都での大規模な清方の回顧展は45年ぶりとなり、京都国立近代美術館での開催は初めてとなります。

清方の代表作として知られながらも、長いあいだ所在不明だった《築地明石町》(1927年)が発見され、三部作となる《新富町》、《浜町河岸》(いずれも1930年)とともに東京国立近代美術館に収蔵、公開されたのは2019年。44年ぶりに公開された三部作は、当時大きな話題となりました。本展は、その三部作をはじめ、110点以上の日本画作品で構成される清方の大規模な回顧展です。しかもこの三部作は2会場、全会期を通して展示されるという、またとない機会です。

清方は美人画家として評されますが、実際には市井の人々の生活や季節感を大切にしたい作品を数多く描いてきました。「もと需められて画く場合はゆる美人画が多いけれども、自分の興味を置くところは生活にある。中層以下の階級の生活に最も惹かる」と清方は語っており、初期の作品から一貫して庶民の暮らしに関心をもって描き続けました。美人画、風俗画、肖像画、文学や歌舞伎に取材した作品など幅広い制作活動からは、清方が生活や文化に見出した美があらわされています。60年以上に及ぶ画家の画業を振り返る本展では、清方しか描けない日本画が一堂に会します。回顧展では初公開となる作品も出品される予定で、清方好きには見逃せない展覧会となりそうです。清方没後50年となる節目に、美人画だけではなく、ほんとうの清方芸術に出あえる展覧会になることでしょう。

当館からは築地川の思い出を綴った画帖《築地川》と、初冬の下町を描いた《十一月の雨》を出品します。いずれも明治の庶民生活を描いており、清方の思い出が込められた作品です。ぜひ会場で清方の清澄な色彩感覚、巧みな運筆をお楽しみください。
(土屋)